

3 掛川市（旧曾我村）細田地区に伝わる伝記録

紹介者 広岡 俊一

昭和 14 年 11 月（1939 年）

和光（細田地区）住人 杉山 西二（ゆうじ）氏記（記述人 42 歳）

訳 2016 年 9 月 解説 杉山 洋之助氏（92 歳）

・旧細田村とは、元来小村なれど、古くは桜木地区の雨桜天皇王（現雨桜神社）の神田と伝えられ、齋田と称せられていた。慶長十八年（1595）竹内久右衛門が證文人口 226 戸 内男 107 人 女 119 人との記述あり

この細田地区はその昔、和光と呼ばれていた。この地名の起源はこんな伝説が残されている当時掛川町上屋敷・殊勝寺のうしろの山の原に一字の堂があり、掛川の里から岡津の原の下あたりまでが一望の内に収められた。薬師如来が祀られあり、堂守りも住んでいた。

陽も沈み、あたり一面には夜の帳（とぼり）が下ろされようとしている時、この原の上から細田の東はずれの方角を見ると、ここばかりは薬師の御光りがさして薄明りに明るく浮かび上がり、生い茂っていた樹々や家が、和やかな光がさして薄明りに明るく浮かび上がり、生（お）い茂っていた樹々や家が、和やかな光に包まれてまるで極楽浄土を見る様に見えたとの事である。たまたまこの薬師堂に一夜の宿を借りた六部がこれを見て「あそこが和光よ」と言ったのが和光の地名の起源であると伝えが残されています。、現在地区に架かる橋（逆川）が和光橋として称せられて残されている。

この地区に残されている逆川の状況の中で、当時和光（現細田地区）は東海道街道の中でも要衝であり、逆川の船着き場として、地方に於ける交通経済の一大中心地であった。

雨が晴れると、増水した逆川を大島（現在の福田豊浜）から 5～6 杯の舟が棹で押し上って来て和光橋の下へ繋いだ。そして近在から馬や荷車で集められた米を積み込んで、大島に下った。ここの舟は 25 俵づつも積んで、米は和光橋の袂から急な堤防の坂をころがして落し、舟に栈橋をかけて積み込まれ、又馬で来たお米は、その背に積んだまま急な坂を下って川岸に至り舟に積み込んだのである。馬道と言われた道が橋の東側から橋の下をくぐって川へ降りるように造られてあった。私共の子供の時分にもこの道はあって、よく橋の上から飛び降りたものである。



旧和光橋（S28 年完成時）

又和光にも同じ舟が一艘あり、やはりお米を大島に運んだ。この舟は私の祖父藤吉と高御所の戸田寛作氏とが持っていたもので、塩沢伊平氏の父林平氏が管理したり、また船頭をしたりしていた。大島に着いた米は何百石積みと言う大船に移されて江戸や大阪に移出されていたのである。

ある時、戸田寛作氏が米の荷主としてこの舟に乗って江戸に向かったが、海上暴風雨に襲われ命からがら江戸近くに吹き付けられたという事もあった。和光の舟はだいたい大島で一泊し翌日は石材、甕（かめ）、土管などの焼き物を積み込んで川を上り掛川まで行って降ろした。

小雨が降ったり、止んだりして水加減が丁度良いと毎日の様にこれらの上り下りの船頭の舟唄で和光川（現逆川）は賑ったものでしたが、減水して来ると所々にある井台（須止め）が通行の邪魔をして舟の交通は途絶した。ただし井台には船通しというものがあり、舟の通る時は明けて貰えることになっていた。勿論船着き場は和光のみでは無かった。掛川地方の米は掛川から積み込まれたのである。また曾我村で生産された製茶は地方の商人に買い取られて和光から大八車に積まれ、静波（現相良町）へ運ばれた。そこには千五百石積みの船が着いていて、それに積まれ海路東西は運ばれた。帰り車には相良塩を積んできたのである。

最近の豪雨災害の災害発生河川情報でも全国ニュースで掛川市和光橋の逆川水位計が氾濫水位に達したとの情報が発せられている。

尚 本稿を草するに当たり、鈴木藤十氏、塩澤伊平氏、落合喜平氏等から有力な御助言をいただいた事を附記して置きます。

参考 掛川誌稿 抜粋

提供 広岡 俊一

細 田 村

さいださわだ そん でんち おお たなか むら こん ところ たなか ぶんそん い がんらいしょう
細田澤田二村の田地も多く田中の村に混せし所あり、田中の今村なりと云、元来小
そん ふる あめさくらてん の う しんでん さいだ しょう けいちょう ねんたけうち
村なれば、古へは雨 櫻 天皇王の神田ゆゑ、齋田と 称 せしものにや、慶 長十八年竹内
く う えもん しょうもん さいだ さいだ つく いまさいだ さいだ くん さいだ じ したが
久右衛門が 證 文、細田を齋田に作る。今細田を佐以駄と訓するによれば齋田の字に 従
ただし ぶしゅうとしまぐん むかしさいだ いむら いはひむら か
ふを 正 とすべし。武州豊島郡に 昔 齋田と云村ありしとて、祝言村と書しものもあり、

ふる さい じ したが い は ひ た よ みなかんだ かんべ たぐい しん し ぞく
古くは齋の字に 従 ひて、伊波比田と呼びしものならん、皆神田、神戸の 類 にて神祠に厲
せし地名と見ゆれば、此村も同じ名と見へたり。慶 長 十八年八月二十一日竹内久右衛門
しょうもん さいだむらたかあわせ こく の ところ こごうしゃ じまえまえ しょうやく もうつけ もの
の 證 文に、齋田村高 合 二百三十一石之 所、此郷者自前々して諸役なしに申付る者
や その ご しょうしゅだいいいしょうやくめんきよ しょうもん しか げんろくちゅうかけがわじゅく
也とありて、其後の城 主 代々諸役免許の 證 文をあたへらる。然るに元禄 中 掛川 宿
すけつと うまやく かんえい ねん がつじゅんけんぶぎょう だ しょ さいだむら せきすい う いけ
助人、馬役あたりしにより、寛永七年三月 巡 見 奉行へ出せし書に、細田村は堰水雨池
みずひでり そん ところ けいちょうちゅう いた でんち あ ひゃくしょう たいてん
もなく水 旱 の損ある 所 ゆゑ、慶 長 中 に至り、田地も荒れて百 姓 も退轉せるに
しょうやくめんきよ い こと
より、諸役免許ありしと云事をしるせり

こうてい いちりあまり
行程 一里 許

た ひゃく ごく と しょう ごう
田、二 百 三十八石四斗五 升 三合
戸、五十六
人口、 二百二十六、内男 百七、女 百十九

くしもち えき じ じんか まる もち くし つらぬ たびびと りぞくこれ はりつけ
串 餅 驛路の人家、丸き餅を四つになし串に 貫 きあぶりて旅人にすゝむ、俚俗是に 磔
もち よ
餅と呼ぶ。

えき じ きた もり むらなか まつ ところ
八幡宮 驛路の北に森あり、村中の祭る 所 なり

こうぜんじ そうどうしゅうとんべむらじょうこういんまつ
高善寺 曹 洞 宗 富部村 常 光 院 末

さいねん じ じょうどしゅうかけがわにとうまちてんねんじまつ こうぜんじ さいねんじとも えき じ
西念寺 浄土 宗 掛川仁藤町天然寺末 高善寺、西念寺共に驛路にあり

はくせんじもとし つながわ きた はくせん じ く ぼ い ところ た なかむらもりだいら はくせん じ きゅう し い
白泉寺舊趾 綱川の北に白川寺久保と云 所 あり、田中村森 平の白川寺の 舊 趾なりと云。

あんずるに く かい まさかつ てんぶん ねんもりだいら い きよ はくせん じ はく
按 久 貝 正勝なるもの、天文十一年森 平に移居して、白川寺を白
せん じ あらた じ き み そのころてら うつ み
泉寺と 改 めしよし、寺記に見へたれば、其頃寺をも移せしものと見え
たり。